

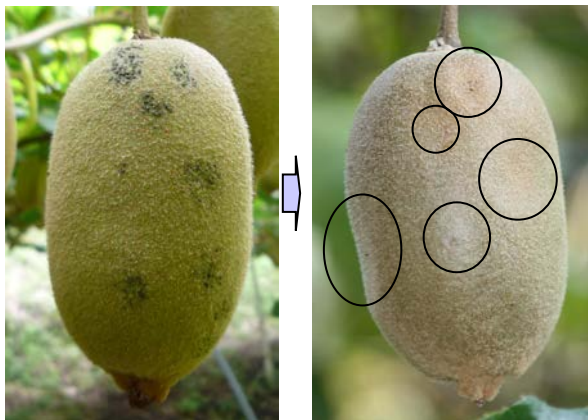
# 「キウイフルーツすす斑病」の発生と防除対策

平成 20 年に伊予市において県内で初確認された「キウイフルーツすす斑病」は樹上で葉や果実に黒色のすす状の病斑や果実に凹状の病斑を形成するだけでなく、貯蔵中にも同様の病斑が発生し問題となる。

このため、発生地域の拡大と果実被害を最小限に抑えるため本病の発生生態の解明と防除技術の検討を行った。



写真1 葉裏のすす状病斑 (紅妃)



すず状病斑 凹状病斑

写真2 果実の病斑 (Hort16A)

## 発生生態

現時点では伊予市、宇和島市、今治市のみで確認しており、発生面積は約 1.5ha。伊予市では発生が拡大傾向にある。

県内で経済栽培されている品種では、「Hort16A (ゴールドキウイ)」、「紅妃」、「ヘイワード」などほとんどの品種で発生を確認している。特に「Hort16A」は本病に弱い傾向である。

現在、県内の「ヘイワード」における発病程度は低いが、他県では発病程度が高く、引き続き注意が必要である。

発病は葉・果実とも 7 月上旬から始まり、収穫後の落葉期まで続く。

樹上での果実発病は「Hort16A」では確認されているが、「紅妃」では確認されていない。また、両品種とも貯蔵中に新たに発病し、時間の経過と共に被害が増加する。

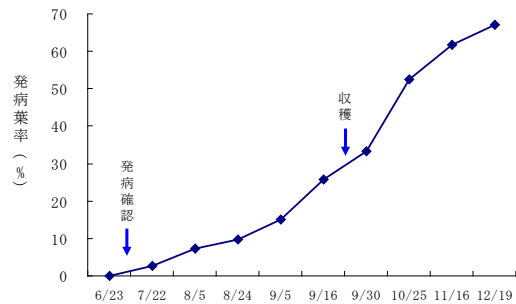


図1 葉におけるすす斑病発生推移 (紅妃)

## 有効な防除技術の検討

ベンレート水和剤(2,000 倍)及びビストロビードライフフロアブル(2,000 倍)の効果の比較を行ったが、樹上及び貯蔵後の何れも両剤ともすす斑病に対し高い効果が認められた。

さらに、ベンレート水和剤を供試し、防除回数について検討を行ったところ、2 回散布、3 回散布ともに効果が認められた。そこで 2 回散布の散布時期について貯蔵中の果実で効果を確認したところ、散布間隔を 2 ヶ月にした場合には効果が低くなった。これらのことから 6 月～8 月にかけて、1 ヶ月間隔での散布が有効であることが明らかとなった。

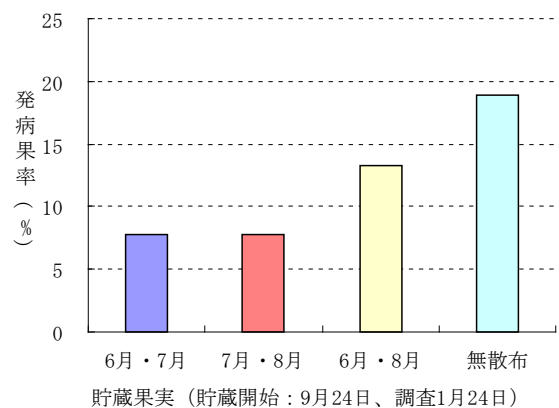


図2 ベンレート水和剤の散布時期が貯蔵中の果実発病に及ぼす影響 (紅妃)

(病理昆虫室 主任研究員 毛利真寿代)